

平成最後の冬がゆく

——栗子連山・吾妻連峰・安達太良連峰の残雪——

大滝会特別会員 鹿摩貞男

はじめに

平成最後の冬も足早に去り春本番となりました。

先日、早春の3月9日（平成31年）の福島市内は、素晴らしい好天に恵まれ文字通り雲一つない久しぶりの快晴で、周囲の高い峰々吾妻・安達太良の両連峰が青空に映えていました。冬の名残白銀の山々が紺碧の空に聳え絶好の撮影日和となりました。福島市の南方に位置する安達太良連峰の場合は、好天の時でも太陽光線の関係かとも思われるが、かすみがかかったような感じでスッキリしないことが多いのですが、今回はくっきりと見えています。

旧万世大路の通る栗子連山（仮称）或いは信夫山の北方に連なる山々（栗子山地、舟形・蔵王山地）も綺麗に見えて、信夫山の各撮影ポイントから素晴らしい眺望を堪能することができました。今回は、その栗子連山について奥羽山脈に関連付けた解説を試み、信夫山についても若干紹介していきたいと思います。また浅学の身でおこがましいのですが、吾妻連峰・安達太良連峰についても蘊蓄を傾けて見ました。

信夫山からは奥羽山脈を一望することができます。（写真-1①～④）



写真-1① 【吾妻・磐梯山地】
（磐梯・安達太良火山地域）
右側吾妻火山地区（吾妻連峰）、
左側安達太良火山地区（安達太良連峰）。
信夫山烏ヶ崎から望む。



写真-1② 【吾妻・磐梯山地】
栗子山地地区（非火山性地域）。
北西方向を望む。中央、仮称栗子連山、
右側七ツ森、左端は吾妻連峰。
信夫山烏ヶ崎から望む。



写真-1③ 栗子山地の北西～北方向を望む。
左端七ツ森、中央大作山、右側御齊所山、
右端萬歳楽山。背後の白い山は蔵王連峰。
信夫山湯殿山神社背後から望む。

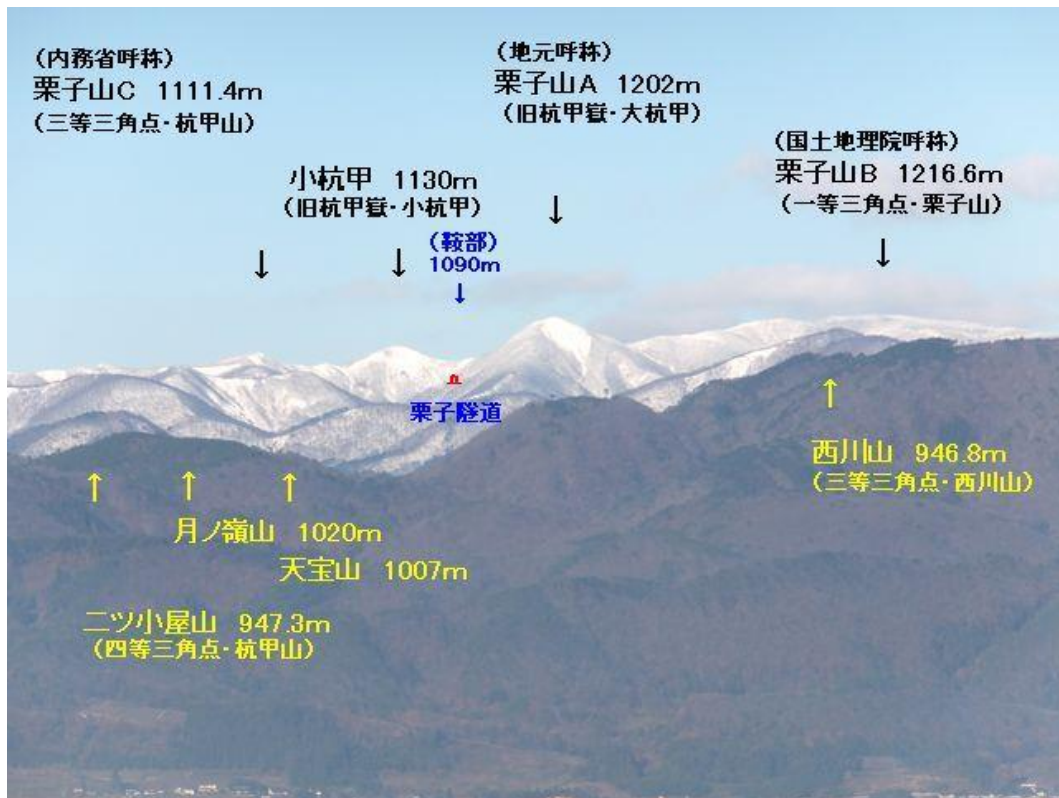


写真-1④ 栗子山地の北～北東方向を望む。
左端大作山、左側御齊所山、萬歳楽山、
中央半田山、右端阿津賀志山。
真っ直ぐ延びるのは東北新幹線、斜交して
いるのは国道 13 号。
湯殿山神社背後から望む。

1. 栗子連山(栗子山地)

最初に栗子連山^{くりこれんざん}について紹介させていただきたくけれども、栗子連山などというのは聞いたことがないと思われて当然で、筆者が勝手に命名しているものである。旧国道 13 号(万世大路)栗子隧道^{ずいどう}の真上の福島・山形県境には標高 1100～1200m クラスの峰々が南北に 4 座連なっている。これが栗子連山と筆者が仮称しているものである。その 4 座の中には、^{まぎ}紛らわしいけれども「栗子山」と称するものが 3 箇所存在する。福島県側から見て中央の形の良い山が栗子山 A (標高 1202m)、その右側(北側)のなだらかな^{りょうせん}稜線の頂上に栗子山 B (1216.6m)、そして栗子山 A の左側にやや低い峰小杭甲(約 1130m)があつて、その左側(南側)に同程度の高さの峰があるけれども、これを栗子山 C (1111.4m)とこれまた筆者が勝手に命名している。これらの詳細な解説については、後述【参考】に示しておいたので興味のある方はお読み下さい。

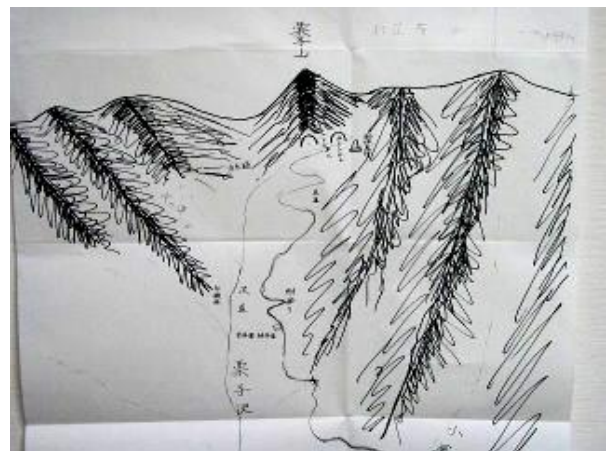
(参考写真-1①～③)



【参考写真-1①】 福島市内信夫山・烏ヶ崎から望む栗子連山(栗子山ABC、小杭甲)
H271209



【参考写真-1②】 米沢市内、旧国道13号花沢
跨線橋から栗子連山を望む。
H280419



【参考写真-1③】 地元呼称栗子山図、米沢側
から望む。
米沢市在住高橋昭平翁筆、
昭和2年生。
歴史の道土木遺産萬世大路
保存会提供)

【栗子山地（栗子連山）の写真】

以下信夫山各撮影スポットから望む栗子山地（栗子連山）及び神社や福島市内等を紹介していきたい。

(1) 羽山・烏ヶ崎から望む

信夫山全体については後述するけれども、信夫山の西側の峰、^{はやま}羽山の西端を^{からすがさき}烏ヶ崎（標高 267

m)と云い、元は吾妻山（水神・農耕神）の遥拝所（護摩壇）であったという。特徴のある岩山である。現在は、寺山にある第1展望台へ向かう新道が延長され月山神社下の駐車場（月山駐車場）まで連絡道路ができていて近くまで車で行くことができる。その駐車場から烏ヶ崎までは約300mの山径を歩いて行く。

烏ヶ崎から福島西部の眺望はまさに絶景である（吾妻・安達太良連峰は後述）。

(写真-2①～写真-4④)



写真-2① 栗子連山(左)と七ツ森(右)



写真-2② 栗子連山4座。
中央、栗子山A、その右側栗子山B。
栗子山Aの左側小杭甲、その左栗子山C。
写真下、E13東北中央自動車道福島
大笹生IC付近。



写真-2③ 杭甲嶽と栗子山C(左端)



写真-2④ 旧杭甲嶽
(右側大杭甲=栗子山A、左側小杭甲)



写真-2⑤ 栗子山B
(国土地理院呼称栗子山、標高 1216.6m
(一等三角点「栗子山」)。

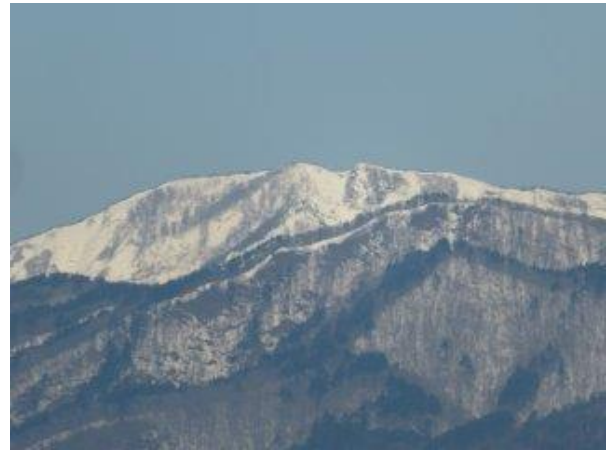


写真-3 七ツ森
(標高 1218.8m、三等三角点「七ツ森」)



写真-4① 〔撮影ポイント〕
羽山西端・烏ヶ崎(標高 267m)全景。
元々、吾妻山(水神・農耕神)遥拝所
(護摩壇)。



写真-4② 福島駅周辺市街地を望む。
中央東北新幹線、右へ分離山形新幹線、
線路の上方が福島駅。
右手前県立図書館。
その上、東北本線・阿武急線・飯坂線。



写真-4③ 阿武隈急行:福島側に制御電動車の
AM8100 形、槻木側に制御付随車の
AT8100 形を連結
H310309



写真-4④ 福島市街地から望む烏ヶ崎。

(2) 羽山・湯殿山神社背後から望む

湯殿山神社（ご祭神：大山祇命・大己貴命）は、鳥ヶ崎まで行く山径のほぼ中間にあり羽山の頂上である。湯殿山神社の東南方向の月山駐車場のすぐ上にある月山神社（ご祭神：月読命）と同様に、元々社殿なき神座で霊岩が御神体（ひもろぎ）となっているという。湯殿山神社背後の霊岩は大日岩（金剛界・胎藏界）と云われ行場（修験者山伏の修業場所）となっている。この岩場が信夫山の最高地点（標高 275m）であるらしい。なお、鳥ヶ崎には、三等三角点「鳥ヶ崎」がある。

[栗子連山・七ツ森]

(写真-5①～写真-6⑤)

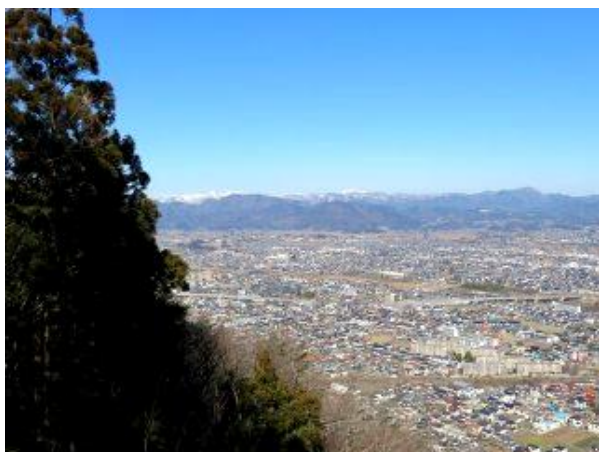


写真-5① 「栗子山地」の北西～北を望む。栗子連山(左)と七ツ森(中央)、大作山(右端)。



写真-5② 栗子連山(左)と七ツ森(右)。



写真-5③ 栗子連山 4 座。

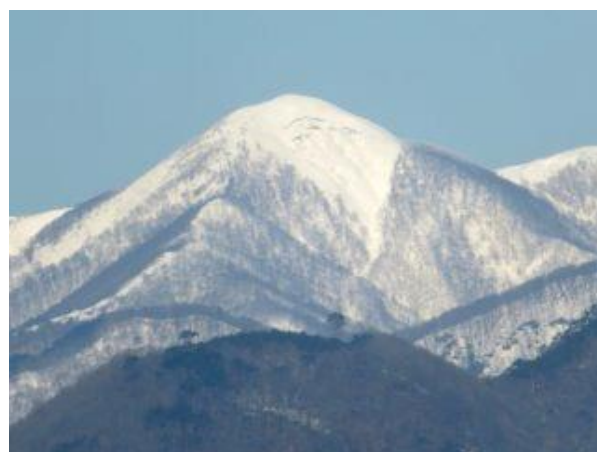
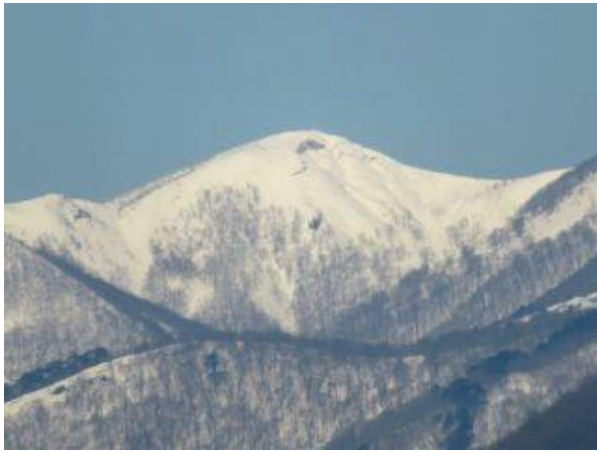
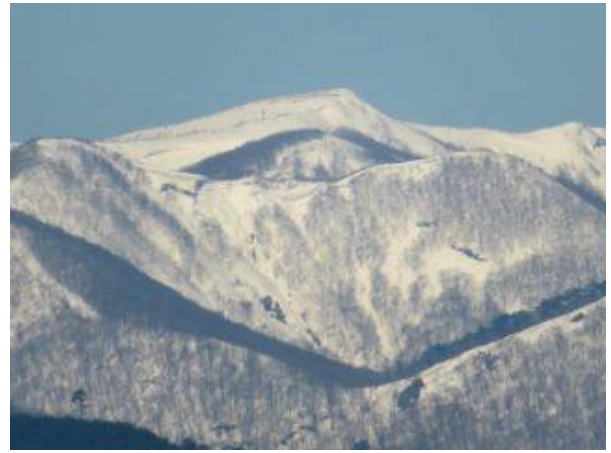


写真-6① 栗子山 A
(旧杭甲嶽・大杭甲、地元呼称栗子山、
標高 1202m)



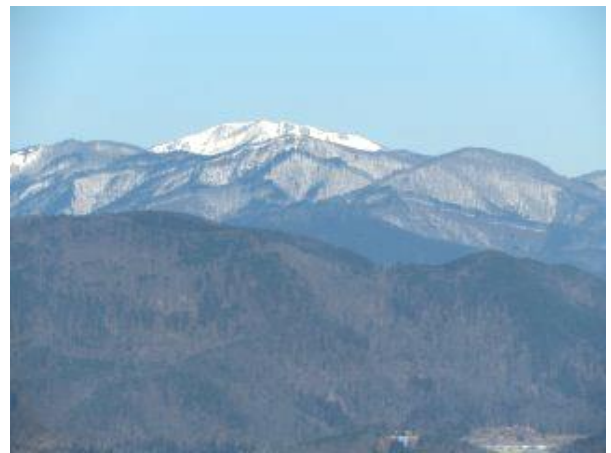
写真一6② 小杭甲
(旧杭甲嶽・小杭甲、標高推定 1130m)。



写真一6③ 栗子山 C
(旧内務省呼称栗子山、標高 1111.4m。
三等三角点「杭甲山」)



写真一6④ 栗子連山関連。
左から二ツ小屋山(標高 947.3m、
四等三角点)・月ノ嶺山(1020m)
・天宝山(1007m)、右上は栗子山 C、
小杭甲。



写真一6⑤ 七ツ森

[栗子山地(除く栗子連山)、湯殿山・月山神社等]

(写真-7①~写真-10②)



写真一7① 「栗子山地」北方を望む。
写真中央やや左、大作山(標高 567.7m、
三等三角点「大作山」)、
右側御齊所山(標高 632.7m、
三等三角点「御齊所」)。



写真一7② 奥の白い山々は蔵王連峰、
その左端は御齊所山、
右端が万歳樂山。



写真一七③ 左奥白い山は蔵王連峰・不忘山、その右万歳楽山、右端半田山。



写真一七④ 奥白い山は蔵王連峰・不忘山(標高 1705m)、その右万歳楽山(898.6m)。



写真一七⑤ 左端、半田山(標高 863.1m、三等三角点「半田山」)。



写真一七⑥ 御齊所山(標高 632.7m、三等三角点「御齊所」)。



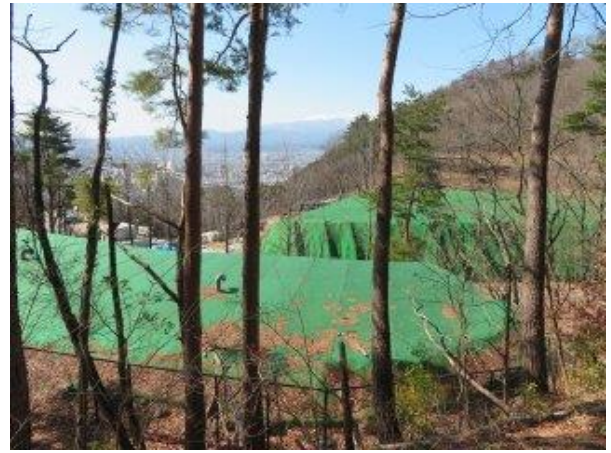
写真一七⑦ 蔵王連峰・不忘山(標高 1705m、三等三角点「不忘山」)。



写真一八① 信夫山北側の住宅街。右側、東北新幹線、仙台方向を望む。斜交するのは国道 13 号信夫山 BP、信夫大橋(L=194m、W=10m×2、S42 下り完、S49 上り完)。



写真一8② 月山連絡道路(仮称)から福島市内(国道13号・信夫通り)を望む。信夫山トンネル直上付近。



写真一8③ 月山連絡道路下、旧青葉山広場付近、除染土砂仮置場。写真奥、安達太良連峰。



写真一9① 湯殿山神社、ご祭神: 大山祇命オオヤマツミノミコト、大己貴命オオナムチノミコト。(現地説明板より)



写真一9② 【撮影ポイント】湯殿山神社社屋背後の湯殿山霊岩(ひもろぎ、御神体)。元々社殿なき神座。写真奥が大日岩行場。



写真一9③ 湯殿山神社と大日岩(信夫山最高地点275m)。大日岩行場。

H310425



写真-10① 月山神社、
ご祭神：月読命ツキヨミノミコト。
以前は石宮であったが昭和15年神明
造社殿を造営（現地説明板より）。



写真-10② 月山神社社屋背後の月山霊岩
（ひもろぎ、御神体）、
元々社殿なき神座。

(3) 寺山・薬師の峯から望む

羽山と羽黒山の間位置し福島の市街地（南側）を一望できる第1展望台がある。そこには（伝説の「五つ石」箇所）、戦時歌謡『暁に祈る』（昭和15年）の記念碑がある（作詞：野村俊夫、作曲：古関裕而、歌唱：伊藤久男、何れも福島県人）。その北側にある頂上付近の「薬師の峯展望デッキ」からは福島市の北側が一望でき、栗子山地の大部分を眺望することができる。また遠く蔵王連峰を望むことができる。

[栗子山地]

(写真-11①～写真-13④)



写真-11① 栗子山地北西（七ツ森）～北東（半田山）を望む。



写真-11② 栗子連山と七ツ森を望む。



写真一11③ 栗子山地の北方向(福島市飯坂)を望む。
左端大作山、中央やや左の手前の山裾
・館山(館ノ山公園大鳥城趾)
・右端御齊所山。



写真一12① 栗子連山4座。
中央、栗子山A、その右側栗子山B。
栗子山Aの左側小杭甲、
その左栗子山C。
写真下、E13東北中央自動車道福島
大笹生IC付近。



写真一12② 杭甲嶽
(右側2座栗子山A、小杭甲)、
左栗子山C。



写真一13① 大作山
(標高567.7m、三等三角点「大作山」)
を望む。



写真一13② 館山
(標高230m、三等三角点「館ノ山」、
館ノ山公園・大鳥城趾)を望む。



写真-13③ 半田山
(標高 863.1m、三等三角点「半田山」)



写真-13④ 信夫山・羽黒山(羽黒神社)。

[市街地等、寺山南側等からの展望]

(写真-14①～写真-15④)



写真-14① 中央、国道 13 号信夫山バイパス、
左上東北本線、斜交東北新幹線、
何れも仙台方向を望む。



写真-14② 下り新幹線通過、国道 13 号を跨ぐ高架橋。



写真-14③ 東北本線、下り貨物列車通過。



写真-14④ 【撮影ポイント】
薬師の峯展望デッキ(標高 225m)。



写真一15① 月山連絡道路から福島市街地を望む
(信夫山トンネルのほぼ真上)。
左側、国道13号(信夫通り)・
右側、東北新幹線。



写真一15② 第1展望台(標高195m)
伝説五つ石(「暁に祈る」記念碑)を望む。



写真一15③ 寺山東端、天台宗青葉山薬王寺。



写真一15④ 薬王寺境内から羽黒山・西屋敷地区を望む。
中央の小径は旧参道御神坂(おみさか)、
大鳥居(赤鳥居)その左なりに天神宮
(天神社)、左赤い屋根は観音堂、
住宅は旧山伏村(宿坊跡)。

(4) その他参考写真

真冬の栗子連山、今年になってから信夫山以外で撮影したものを参考に示す。

(参考写真-2①~2④)



【参考写真-2①】 栗子連山真っ白。
福島市立野田中学校付近から望む。
H310119



【参考写真-2②】 栗子連山を新幹線車窓から望む
(下りやまびこ 205 号、
福島発 9:40、福島駅北側)。
H310130



【参考写真-2③】 栗子連山を新幹線車窓から望む
(下りやまびこ 205 号、
福島発 9:40、福島駅北側)。
H310130



【参考写真-2④】 栗子連山:中央栗子山 A。
国道 114 号渡利大橋(阿武隈川
渡利地内)より望む。
H310205

参考 〈栗子山の謎 ～なぜ3箇所もあるのか～〉

前述の通り旧国道 13 号(万世大路)栗子^{ずいどう}隧道の上には標高 1100~1200m クラスの峰々が南北に連なり福島・山形県境となっている。この県境は、^{あざち}字地^{あざち}でみていくと^{あざち}字杭甲山^{あざち}の分としては南北にはほぼ 2km にわたって続いていて、福島県側では旧地名でいうと「岩代国伊達郡茂庭村 405 番字^{あざ}杭甲山^{あざ}」(※)(明治 15 年作成の丈量帳(地積図・福島県歴史資料館蔵))である。^{ちな}因みに、字杭甲山の下(南隣り)が「字^{よへいきわ}與平沢」、上(北側)が「ジシカ^{だいら}平」でいずれも福島・山形県境になる。

※: 字名の読み(くいこうやま)は、『福島市史資料叢書第 38 輯 福島の小字』(福島市教育委員会、昭和 58 年 3 月)による。なお当該字地の地名は、近接の他の字地「與平沢」等と共に明治 22 年 4 月 1 日に中野村に編入され「^{しのぶぐんなかのむら}信夫郡中野村大字茂庭^{もにわ}405 番字杭甲山」に変更されている。)。

以下若干煩雑になるが栗子連山について解説していきたい。

さて、そもそも「栗子山」とはどこを指しているのか調べてみると、各種文献や国土地理院地形図或いは地元の方の云うことなどを総合するとそれぞれに別の「栗子山」(3箇所)があることが分かり筆者も困惑してしまったものである。そこで、地元旧大滝集落の方に聞いてみた。栗子山があちこちにあるが実際どこの山をさして云うのでしょうか、それに対していみじくも地元大滝の方は「栗子隧道の上の山は全部栗子山なんだよ」と云われました。これは、誠に言い得て妙、「字杭甲山」の県境の山は全部栗子山ということになるのである。従って、規模は小さいかも知れないが、これら連なる峰々を総称する名称として本来であれば栗子連山とか栗子山塊とでも云うべきものなのかも知れないと思った次第である。そこで、筆者が勝手に「栗子連山」と仮称することとしたのである。しかし、栗子山と云われるところが都合3箇所もありこの4座にそれぞれ名前がないのも何かと不便なので、前述のように称することとしたものである。その経緯について若干紹介しておきたい。

その栗子連山の中央に栗のように形の良い山が、福島側からも米沢側からも見える。これは地元の方(福島(大滝)、米沢)が元々「栗子山」と呼んできているもので、これを**栗子山A**(地元呼称、標高1202m)ということにした。しかし、特に断りのない場合は、単に栗子山と云えばこの栗子山Aを指すこととしたい。実は、この山の旧名は「^{くわいこうたけ}杭甲嶽(大杭甲)」といわれていたもので、統一山形県初代県令(県知事)であった^{みしまみちつね}三島通庸(在任期間:M9(1876).8~M15.7)によって栗子山と改められたものである。もっとも地元区長(斎藤篤信)によればそれ以前から栗のように見えることから地元米沢では栗子山と通称していたものだという。(山形県編『山形県史資料篇二 明治初期下三島文書』巖南堂書店 昭和37年7月、206頁参照)

次に2個目の栗子山であるが、福島側から見ると(以下同じ)栗子山Aの右側になだらかな稜線が続きその最高地点が、国土地理院地形図で栗子山(一等三角点名「栗子山」と記されているところがある。お国発行の権威のある地図上の名称であるからには、公式に云えばこちらが本来の栗子山ということになるわけであるが、地元の方が旧杭甲嶽大杭甲の方を栗子山(栗子山Aと仮称)とむかしから呼称されている慣習を尊重しこちらの山は、**栗子山B**(国土地理院呼称、標高1216.6m)と称することとする。栗のような形をした山ということで名づけられた栗子山の由来からして、のっぺらぼうの栗子山B(国土地理院呼称)は本来の栗子山ではありえないであろう。(上掲書、206頁参照)

前記栗子山Aの左側に位置する栗子隧道を挟んで対称となる位置に、^{そうじけい}相似形のようによく似た少し低い山がある。この山も旧名が杭甲嶽で、大杭甲(栗子山A)に対して^{しょうくわいこう}小杭甲と呼ばれていた部分である。杭甲嶽は、大杭甲と小杭甲から構成されているのである。従って、本来であれば当山は栗子山A'とでもすべきところであるが紛らわしいので、折角の旧名であるからそれをそのまま使用させて頂き**小杭甲**(旧杭甲嶽、標高約1130m:地形図からの読み取り)と呼ぶこととしたい。

最後に、その小杭甲の左側(南側)に同程度の高さの峰があるが、三等三角点^{くわいこやま}「杭甲山」(ルビくわいこやまは国土地理院「点の記」による(※))である。三角点名は「杭甲山」であるけれども、

これは当該山名ではなく山名そのものは不明である（山名と三角点名とは必ずしも一致しない）。しかし、旧内務省関連の文献や戦後実施された旧建設省による栗子国道改築事業関連の文献を見ると、どういう訳か当該三角点名「杭甲山」箇所を「栗子山」としているようだ。国土地理院（旧陸地測量部）地形図上では、明治41年の最初の地形図以来、一等三角点「栗子山」の位置が栗子山となっているにもかかわらず、敢えて「杭甲山」の方を「栗子山」としているのか誠に不思議なことでその経緯は今となっては分からない。これが、3個目の栗子山というわけで、これを栗子山C（旧内務省呼称、標高1111.4m）とすることとした所以である。（参考写真-1①～③参照）

※：福島市内の地名の読み方として具体的な場所は不明であるが次の例が示されているので参考までに紹介しておきたい。杭甲岳（くいこうだけ）。抗甲山（くりこうやま）：杭の誤植か？『誰にでもわかる福島県の方言』（福島郷土文化研究会（小林金次郎）昭和61年6月）

参考 〈栗子連山（栗子山地）と奥羽山脈～吾妻・磐梯山地〉

少し横道にそれるけれども、仮称栗子連山が東北地方の地形上どのような位置付けにあるか記しておきたい。併せて、今回紹介している吾妻連峰と安達太良連峰についても若干触れておきたい。もとより浅学の身にて詳細に述べることはできない。

さて東北地方の地形区分としては、南北方向に延びる大・地形区として大きく三分に配列されている。太平洋側から「北上・阿武隈山地」「奥羽山脈」「出羽・飯豊山地」である。筆者の称するところの栗子連山はこれの内、中央に位置する奥羽山脈に属しその最南部の地形区分の中に位置する。奥羽（脊梁）山脈は、北は青森県夏泊半島（陸奥湾に臨む）から南は関東平野北部足尾山地（旧足尾銅山あり、栃木県南西部・群馬県北東部県境）に至るまで約500kmに及び東北の中央を貫く文字通りの脊梁山脈である。延長は極めて長いが幅は狭いのが特徴で、日本海側と太平洋側の分水界となっている。

そのうち奥羽山脈は、東北地方において7つの山地（中・地形区）と津軽海峡とからなっている。北から①恐山山地（陸奥湾を含む）、②八甲田・十和田山地（八甲田火山、十和田カルデラ（火山性凹地）を含む）、③八幡平山地（八幡平火山、岩手火山、田沢湖カルデラなどが含まれる）、④真昼山地（山脈）（東根山地、焼石岳火山を含む）、⑤神室山地（山脈）（栗駒・鬼首・鳴子火山、最上盆地などを含む）、⑥舟形・蔵王山地（山脈）（蔵王火山などを含む）、⑦吾妻・磐梯山地（吾妻・安達太良・磐梯火山や猪苗代盆地を含む）それに⑧津軽海峡である。

また、奥羽山脈を火山分布から着目すると、前記の中・地形区の山地内には（除津軽海峡）、火山地域（クラスター）が包含されており、全部で7地域になる。それらは、太平洋日本海溝に平行して東北地方に弧状に一直線に延びる火山フロント（前線）沿いであって、これらは何れも第四紀（258万年前～現代）火山である。上記の中・地形区分吾妻・磐梯山地内の火山クラスターに磐梯・安達太良火山地域があり吾妻火山（吾妻連峰）、安達太良火山（安達太良連峰）が含まれていて、これらは何れも那須火山帯となる。その北隣は「蔵王・舟形火山地域」となるが他の火山地域名は割愛する。

ところで今回紹介している栗子連山（栗子山地）・吾妻連峰（吾妻火山）・安達太良連峰（安達太良火山）は、すべて「吾妻・磐梯山地」（磐梯・安達太良火山地域を含む）に属する。

また、当「吾妻・磐梯山地」は、6つの小・地形区分しょうに区分されていて、北側からみていくと北隣の舟形・蔵王山地に連続して非火山性の①栗子山地くりこさんち（万世大路所在、栗子連山を含む）、磐梯・安達太良火山地域の②吾妻火山（吾妻連峰）・③安達太良火山（安達太良連峰）・④磐梯火山、低地の⑤猪苗代盆地いなわしろ、奥羽山脈の南端を構成する関東地方帝釈山地たいしやく・足尾山地へと続く非火山性の⑥岩瀬山地いわせである。

非火山性の栗子山地には、山形県境の栗子連山が当然含まれしのぶやま信夫山から望む北西から北東方向には七ツ森おおくさやま・大作山ごさいしよやま・御斎所山おんさいじよやま・半田山ほんだやまへと続くが栗子山地の境界がどこになるかは参考図からは読み取れないが、その背後（北方）に栗子山地に連続する「舟形・蔵王山地」の蔵王連峰を望むことができる。そして、栗子山地に連続して南側には、吾妻火山地区（吾妻連峰）、土湯峠を介して安達太良火山地区（安達太良連峰）と南下し、岩瀬山地を経て那須火山群（関東地方の帝釈山地たいしやく）へと続いているわけである。また、栗子山地の東側（太平洋側）は、北部では奥羽山脈「舟形・蔵王山地」になり、南側は東北地方地形大区分の太平洋側「北上・阿武隈山地」の「福島盆地（信夫盆地・伊達盆地）」になる。

なお、栗子山地は南北 25km、東西 20km の広がりがあり栗子山（1216.6m）を主峰に 1000～1200m の高さの揃った山稜さんりょうがある。主な地質は、新第 3 系（注：2303 万年前～258 万年前の火山岩類）からなるが栗子山地中部には奥羽山脈の基盤である古期（注：6600 万年前～2303 年前）花崗閃緑岩かこうせんりよくが広がっているという（福島市文化財調査報告書第 48 集「万世大路調査報告」（福島市教育委員会平成 19 年 3 月）より整理、注筆者）。

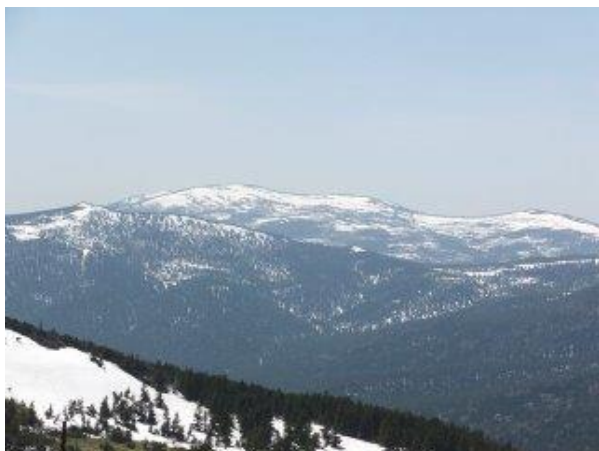
（宮城豊彦ほか『日本の地形 3 東北』（東京大学出版会 2005 年 2 月 21 日）、貝塚爽平ほか『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』（東京大学出版会 2000 年 11 月 13 日）を参考に整理した。）

2. 吾妻連峰(吾妻火山)

吾妻火山（吾妻連峰）は、奥羽山脈の栗子山地から続く吾妻・磐梯山地内の火山クラスター（地域）の磐梯・安達太良火山地域いんげい・あんだたらひやんちにあり、東西南北約 20 km にわたる範囲に広がる標高 1800～2000m クラスの火山群である。東北日本を縦断する火山フロント（前線）上にあって那須火山帯となる。その多くが安山岩あんざんがんや玄武岩質げんぶがんしつからなる溶岩流ようがんりゅうやテフラ（火山灰や軽石等の堆積物＝火山砕屑物せいせつぶつ）で構成される成層火山せいそう（溶岩流と火山砕屑物が交互に積みかさなっていて火山）である。この火山群は、西吾妻（主峰：西吾妻山 2035m 参考写真-3①）・中吾妻（主峰：中吾妻山 1931m 参考写真-3②）・東吾妻（主峰：東吾妻山 1975m 参考写真-3③）に三分され、約 100 万年前から活動開始したと考えられている。（前掲書『日本の地形 3 東北』から要約整理）

一切経山南側山腹・大穴火口付近は現在でも活発に噴気活動を続けており、噴火警戒レベル 2（火口周辺規制・0.5km、H26.12.12）であったものをレベル 1（活火山であることに留意、H28.10.18）に引き下げていたが平成 30 年 9 月 15 日に噴火警戒レベル 2（火口周辺規制・1.5km）に再び引き上げられていた。しかし、噴火の可能性が低くなったとして、この度平成 31 年 4 月 22 日レベル 1 に引き下げられた（気象庁発表）。それに伴い浄土平など東吾妻火山群の中を

通る磐梯吾妻スカイラインは現在通行止めとなっているが、令和元年5月31日再開通の予定となっている。ただし、大穴火口周辺の登山道は引き続き通行規制が継続され浄土平側から一切いっさい経山きまうへの登山はできない（福島県発表）。 **（参考写真-3④⑤）**



【参考写真-3①】 写真中央奥、西吾妻山(2035m、連峰最高峰)。一切経山から望む。
H290521



【参考写真-3②】 写真中央、中吾妻山(1931m)。手前鎌沼。一切経山登山道から望む。
H290521



【参考写真-3③】 東吾妻山(1975m)、鎌沼酢ヶ平側から望む。
H290521



【参考写真-3④】 一切経山南側山腹・大穴火口、鎌沼・一切経山登山道から望む。警戒レベル1発令中。
H290521



【参考写真-3⑤】 磐梯吾妻スカイライン通行止め
(旧高湯ゲート～土湯ゲート L=28.7km)
H30.9.15、13:00～(R元年5月31日再開通予定)。
噴火警戒レベル2に伴うもの。(旧土湯ゲート)
H301007

本項(写真)では、このうち信夫山・烏ヶ崎から眺望できる南北に連なる東吾妻火山群について紹介する。北から高倉山(標高 1461m)・青木山(1389m)・家形山(1877m)・一切経山(1949m)(南側山腹大穴火口)・蓬莱山(1802m)・浄土平(1600m)・吾妻小富士(1707m)・東吾妻山(1975m)・高山(1805m)と10km以上連なり土湯峠を介して安達太良連峰(安達太良火山)鬼面山へと続いていく。(写真-16①~写真-18⑨)

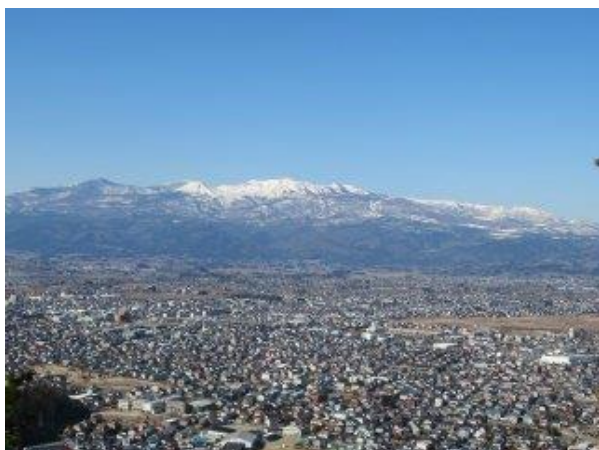


写真-16① 吾妻連峰(吾妻火山群・東吾妻火山群全景)。
右側(北)から高倉山・青木山・家形山
・一切経山(大穴火口)・蓬莱山(浄土平)
・吾妻小富士・東吾妻山・高山。



写真-16② 吾妻連峰(東吾妻火山群中央部)



写真-17① 吾妻連峰(東吾妻火山群北部)
右から高倉山・青木山・家形山
H310309



写真-17② 吾妻連峰(東吾妻山火山群中枢部)
右から一切経山(蓬莱山)、
吾妻小富士(東吾妻山)。



写真-17③ 吾妻連峰(東吾妻山火山群南部)
右から(蓬莱山)吾妻小富士(東吾妻山)、
高山。



写真-17④ 吾妻・安達太良連峰接続部。
中央、土湯峠(標高 1272m)、
右吾妻連峰・高山、左安達太良連峰・
鬼面山。

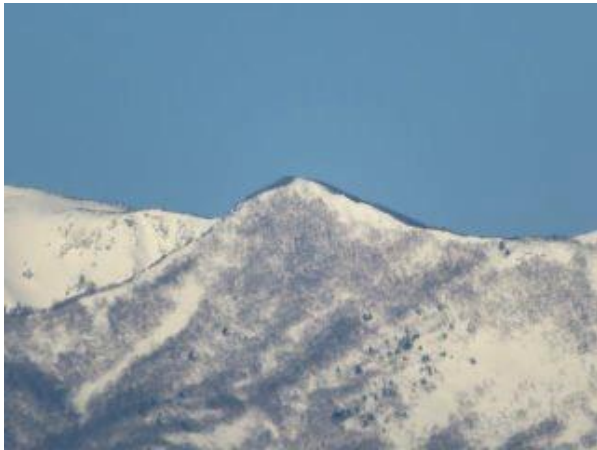


写真-18① 高倉山(標高 1461m)

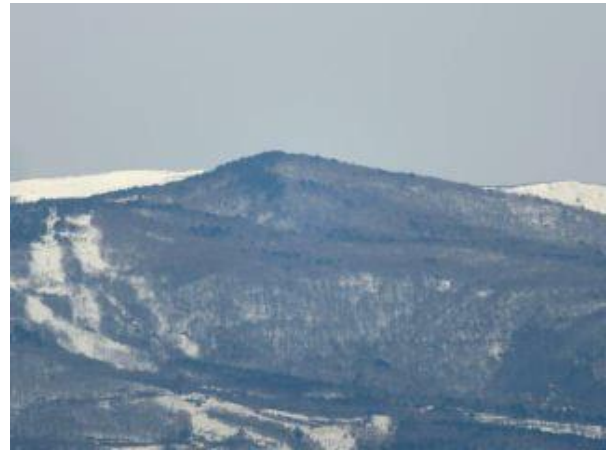


写真-18② 青木山(標高 1389m)、
左側吾妻スキー場跡。

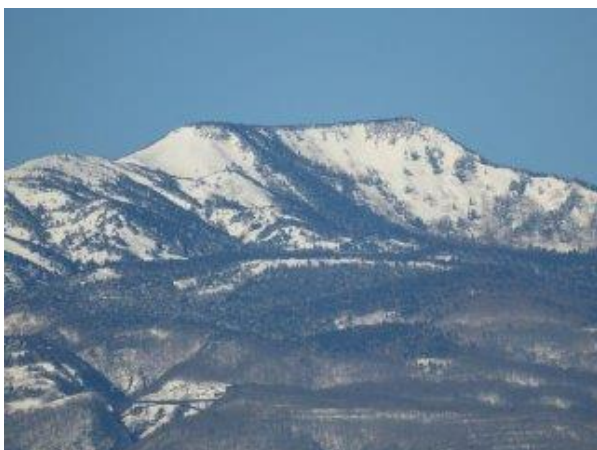


写真-18③ 家形山(標高 1877m)と、
写真下、磐梯吾妻スカイライン不動沢橋
(L=174m、つばくろ谷高さ 84m)。



写真-18④ 一切経山(標高 1949m、一等三角点
「吾妻山」)。
右端山の背後五色沼(雷沼、通称
魔女の瞳)。



写真一八⑤ 一切経山南側山腹、大穴火口(写真中央に噴気)。左側蓬萊山、その手前浄土平(標高約1600m)。



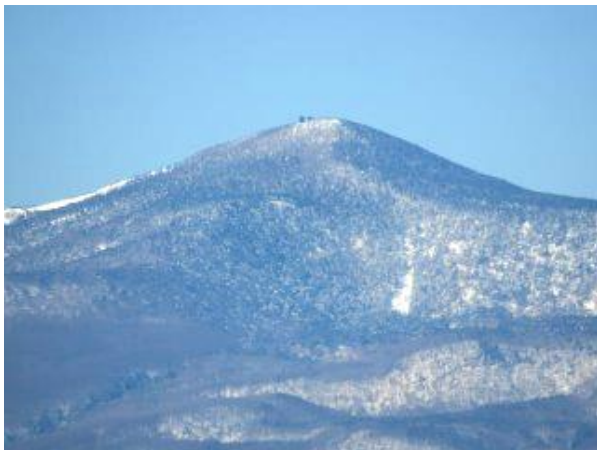
写真一八⑥ 吾妻小富士(標高1707m)、右上蓬萊山、左上東吾妻山。



写真一八⑦ 蓬萊山(1802m)



写真一八⑧ 東吾妻山(標高1975m、三等三角点「東吾妻」)。東吾妻山火山群最高峰。



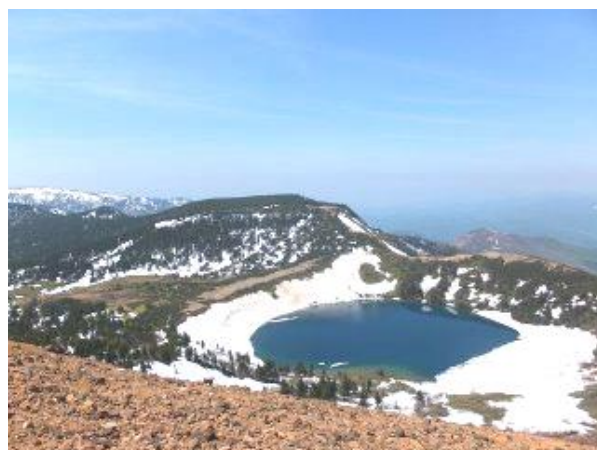
写真一八⑨ 高山(標高1805m、三等三角点「青木山」)

参考 〈吾妻連峰（吾妻山）の行政区画、信仰と歴史等について〉

ちなみに吾妻山というのは、そのような固有名のある単独の山名（火山）ではなく、現在は西吾妻・中吾妻・東吾妻各火山群の総称となっている（吾妻連峰と同義）。吾妻山は福島県（福島市・猪苗代町・北塩原村）と山形県（米沢市）に跨がっており、^{いえがたやま}家形山から西へ西吾妻山に向かって県境となっている。福島県側では、家形山から南へ一切経山・東吾妻山・土湯峠を境として東側が浄土平や吾妻小富士・高山を含み福島市となり（東吾妻地区）、西側が^{やま}耶麻郡猪苗代町となる（中吾妻地区）。また、中吾妻山の西側を南北に中津川が秋元湖へ流れているが（中津川溪谷）、これが耶麻郡北塩原村と猪苗代町の境界になっており、西側の北塩原村側に山形県境（米沢市）となる西吾妻山がある（西吾妻地区）。吾妻山は、磐梯朝日国立公園（安達太良連峰含む）として指定されている（昭和 25 年 9 月 5 日）。

吾妻山は古くからの信仰の山でもあった。^{あずまやだけ}家形山、^{あずまやくに}一切経山には東屋嶽神社、東屋国神社があり、^{かたちぬま}雷沼（五色沼、一切経山と家形山の山裾にある火口湖（**参考写真－3⑥**）には^{あずまやぬま}東屋沼神社があったという。現在その跡がどこになるか分からないということである。^{かんぼつ}旱魃の時は、この五色沼で雨乞いの祈りを捧げると^{たちま}忽ち雨が降ったということである。

（『福島市史資料叢書第 30 輯 信達一統志』
福島市教育委員会 35 頁）



【参考写真－3⑥】 吾妻山・一切経山(1949m)頂上から望む五色沼(雷沼、通称魔女の瞳)。正面は家形山(1877m)、右奥は高倉山(1461m)。H290521

このことから吾妻山が水神・農耕神として信仰の対象となっていて、前述の通り吾妻山（一切経山や家形山）を一望できる信夫山・烏ヶ崎が^{ようはいじよ}遥拝所となっていたのであろう。

なお、^{あずまやくに}東屋国神社は福島市飯坂町中野、^{あずまやぬま}東屋沼神社は同市平野に現在は鎮座しており、^{みょうじんたいしゃ えんぎしき しきだいしゃ}何れも名神大社で延喜式・式内社(※)であることから^{りつりようせい}古代律令制下（7～10 世紀）の古神社でありその歴史は随分と古いものであることが分かる。

※古代律令制下（7～10世紀、飛鳥～平安時代）において名神祭（国家的祭祀）を実施する社格を有する神社で「延喜式神名帳」に記載のある神社を^{しきだいしゃ}式内社という（延喜式：平安時代中期に定められた律令（法律）の施行細則（式）のこと）。

山名「吾妻」の謂れは、山の形が^{あずまや}四阿（東屋）(※)の屋根に似ているところから名付けられたという（家形山）。これが付近一帯の山全体をさすことになった。別名思山ともいう、これは火山で煙を出していることから「もえやま」（燃山）となり転化して「おもいやま」になった。（吉田東伍『増補大日本地名辞書 第七巻奥羽』昭和 45 年 3 月）

※四方の柱だけで、壁がなく、屋根を四方葺き下ろした小屋（広辞苑）

また、日本武尊^{やまとたけるのみこと}が東征のおり信濃国碓氷嶺^{うすいとおげ}より東方を顧^{かえり}みて吾妻^{わがつま}（橘姫^{たちばなひめ}）恋しいと言われたことから東国を吾妻^{あづま}とよぶことになったので、当該山も吾妻山^{あづまやま}ということになった。また橘姫に思いをよせられることから思山ともいうことになったという。（前掲書「信達一統志」）

3. 安達太良連峰(安達太良火山)

安達太良火山（安達太良連峰）は、吾妻火山と同じ火山クラスター（地域）で磐梯・安達太良火山地域^{安達太良火山地域}にあり、前述のように土湯峠を介して吾妻連峰の南側に連なる火山群である。南北約7kmにわたって安山岩質の火山が列を成し、南北約15kmずつの菱形の範囲に及ぶ複合火山（複数の小さな火山帯が寄り集まったもの）である。安達太良火山本体は約80万年前に活動を開始したと考えられている。（前掲書『日本の地形3 東北』から要約整理）

本項（写真）では、このうち信夫山・烏ヶ崎から眺望できる南北に連なる安達太良火山群の東側について紹介する。北から、鬼面山（標高1482m）・箕輪山（1728m）・鉄山（1709m）・矢筈森（1673m）・安達太良山（1700m）・箆山（1548m）・和尚山（1602m）と前述の通り7km以上にわたって連なり、岩瀬山地（非火山性）を経て関東地方那須火山群（帝釈山地）・足尾山地（奥羽脊梁山脈最南端）へと続いていく。（写真-19①～写真-20⑤）



写真-19① 安達太良連峰(安達太良火山群東側全景)。右側(北)から鬼面山・箕輪山・鉄山・矢筈森・安達太良山・箆山・和尚山。



写真-19② 安達太良連峰(安達太良火山群東側・北部)。右(北)から鬼面山・箕輪山。



写真一19③ 安達太良連峰(安達太良火山群
東側・中央部)。
右(北)から箕輪山・鉄山・矢筈森。



写真一19④ 安達太良連峰(安達太良火山群
東側・南部)。
右(北)から矢筈森・安達太良山
・和尚山



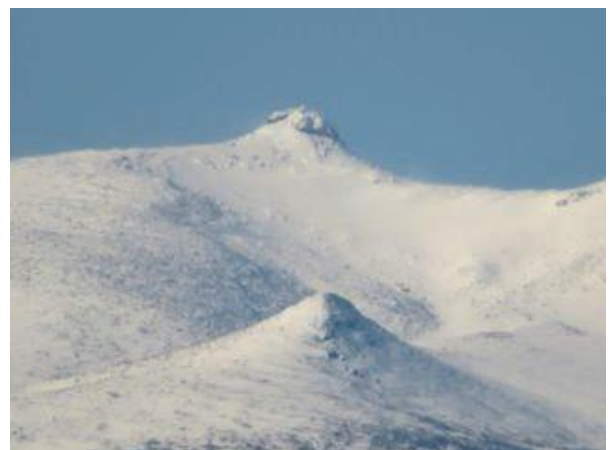
写真一20① 鬼面山
(標高 1482m、三等三角点「鬼面山」)



写真一20② 箕輪山
(標高 1728m、三等三角点「箕輪」)



写真一20③ 右側、鉄山
(標高 1709m、四等三角点「鉄山」)、
左側、矢筈森(標高 1673m)。



写真一20④ 安達太良山
(標高 1700m、二等三角点「大関平」)。
下側、籠山(標高 1548m)



写真-20⑤ 和尚山
(標高 1602 m、三等三角点「前嶽」)

参考〈安達太良連峰の行政区画、信仰と歴史等について〉

安達太良連峰は全域が福島県内にあり、福島市・耶麻郡猪苗代町・二本松市・安達郡大玉村・郡山市の3市1町村の五つの自治体に跨がる。北からみていくと、鬼面山から箕輪山を結ぶ線の東側が福島市、西側が耶麻郡猪苗代町で南側は二本松市となる。箕輪山から安達太良山の線の東側は二本松市で、西側は猪苗代町と郡山市になり安達太良山頂は郡山市となるようだ。安達太良から和尚山の線の東側が大玉村、西側が郡山市になり、郡山市側和尚山（安達太良山）山麓の石筵川には日本の滝百選の銚子ヶ滝(参考写真-4)がある。



【参考写真-4】 銚子ヶ滝(日本の滝百選)
落差約 50m
郡山市熱海町石筵川
H230828

ところで、信夫山からの眺望では確認できないが安達太良山の西側には沼ノ平（標高 1452m）の爆裂口がある。国道 115 号の土湯峠を越えて猪苗代側に出て東側を見ると爆裂口が見える。明治 33 年（1900 年）7 月 17 日に大爆発があり新たな火口が形成されそこにあった硫黄精錬所が全滅し従業員 83 名のうち多く方が犠牲になったという。

安達太良山も吾妻山と同じく農耕の神として、その山頂に安達太良大明神(旧名 甕名神、飯豊別神)があり古くから信仰を集めていたようで、現在は本宮市館ノ越に安達太良神社として祀られている。

安達太良山（別名乳首山）の地名の謂れは明確でないようで、一説には安達郡の最高峰すなわち太郎(長男)ということで安達太郎山と呼ばれ転化し安達太良山になったという。

また、前掲書『大日本地名辞書』によると、古書に「安達嶺^{あたたみね}」とあり、萬葉集に「安太多良」とある。安太多良（安達太良）の原名は「アタタ」で良（ら）は語勢を強める意味で付加されたもので、後世「安達」の文字をあて「安達太良^{あだたら}」となったという。アタタの意味は同書からは不明。

さて、安達太良山（阿多多羅山）は高村光太郎の詩集『智恵子抄』で全国的に有名になっているところである。また、この度新元号は、萬葉集を典拠とする「令和」と決定されたが、安達太良山も萬葉集に3首ほど詠まれている名峰である。そのうちの1首を紹介しておきたい。

○ 陸奥^{みちのく}の安太多良^{あだたら}真弓^{まゆみ}弦^{つら}着けて引かばか人の吾^わを言^{こと}なさむ（読み下し）

（萬葉集 卷第七 一三二九）

口訳（口語体）：陸奥^{こうやく}の安太多良山（安達太良山）の真弓（檀^{まゆみ}：木の名称、弓の材料）に弦を付けて引くように（女をひくの比喩）、人に言いよったら他人は何かといたてるだろうか（※）。

※（）内注は原著に基づき筆者追加。

「一人の美女への執心を示した男の歌」（伊藤博『萬葉集釋注 四』集英社文庫 2005年4月）

（中西進『萬葉集（二）』講談社文庫 1980年2月より。著者中西進氏は、新元号「令和」の考案者とされる。）

（参考：『福島県民百科』福島民友新聞社、『福島大百科事典』福島民報社、月刊誌2017年『福島の進路7月号』（一財）とうほう地域総合研究所）

4. 信夫山について

信夫山（通称御山、古名青葉山）は、信達平野（福島盆地＝信夫盆地と伊達盆地＝信達）のほぼ中央に位置する東西2.7km、周囲約7kmの独立峰で、西から羽山（標高275m：最高標高）・寺山（216m）・羽黒山（260m）・熊野山（268m）・立石山（220m）等（三山五岳）の峰々からなりその総称である。（参考写真－5①～③）



【参考写真-5①】 信夫山全景 花見山から望む。 H251123



【参考写真-5②】 北側からの信夫山全景。
大鳥城趾(館山)から望む。
H301021



【参考写真-5③】 信達平野と信夫山。
県道 30 号線・本宮土湯
温泉線(旧 115 号)西鴉川付近
から望む。
H301007

〈信仰の山・信夫山、羽黒神社と暁参り〉

信夫山は、麓の黒沼神社が水の神、西峰羽山は山ノ神、中峰羽黒山が五穀の神ということで農耕神として、原始から山岳信仰のお山（ご神体）であったようだ。羽黒山には羽黒神社（羽黒大権現）があり、平安時代（12世紀）には羽山と共に修験道（※）の道場があった。山上には、堂社仏閣があり山伏（修験道の修業者）がいて多くの衆徒が信夫山に住んで山伏村（信夫山村）を形成していたようである。

※ 役小角（えんのおづの）を祖と仰ぐ日本仏教の一派。日本古来の山岳信仰に基づくもので、もともと山中の修行による呪力の獲得を目的とした。（広辞苑）
役小角（えんのおづぬ、とも）は飛鳥時代（7世紀）の呪術者。

前節「栗子山地（栗子連山）の写真」において、撮影ポイントとして羽山・寺山（湯殿山神社・月山神社）について若干紹介しているので、本項では主に羽黒神社について触れる。

羽黒神社（旧神号羽黒大権現、明治2年12月改称）については、いつ、何の神をまつたのかは不明だそうである。現在、ご祭神は、第30代敏達天皇（ヌナクラフトタマシキノミコト（淳中倉太珠敷命）、聖徳太子の伯父、母は石姫皇后）とされている（明治11年撰『福島県神社明細帳』、その由緒勸請は不詳とされている）。しかし、伝説では兄の「ヌナカフトノミコト（淳中太命）」が祭神となっているようである。ヌナカフトノミコトは、弟（ヌナクラフトタマシキノミコト、後の敏達天皇）との政争（皇位継承）に敗れ6人の従者を連れて陸奥国信夫山に下り薨去後に羽黒大権現として祀られたという。また、その母である石姫皇后（第29代欽明天皇皇后）は、長兄である皇子ヌナカフトノミコトのあとを追って7人の家臣に護られて信夫山まで来たけれども、皇子が既に他界していたことを知り、悲しみのあまり現在の黒沼神社のところ（伝説：腰掛石に座ったまま）で亡くなり黒沼神社（延喜式・式内社、名神大社）のご祭神（黒沼大明神）となったという。欽明天皇は、石姫皇后（第28代宣化天皇の皇女）の他に5名の妃がいて皇子が多くいたようであるが、異説もありこれらの話しはあくまでも6世紀飛鳥時代の伝説である。石姫皇后やヌナカフトノミコトが信夫山に来られたということについては史実では確認できないようで、手元の参考書物類（肥後和男他『歴代天皇紀』等）でも欽明天皇の皇后石姫が実在したことは確かであるが、ヌナカフトノミコトという名の皇子については存在を確認できず、弟の「ヌナクラフトタマシキノミコト（敏達天皇）」は勿論実在している。

史実によれば、欽明天皇（石姫）の長子「箭田珠勝大兄皇子（ヤタノタマカツノオオエノオウジ）」（敏達天皇の兄）がいたのであるが夭逝（若死に、欽明13年）している（中公文庫『日本の歴史2』）。従って、皇位を巡る長兄との争いはなかったと思われるが、欽明天皇には多くの皇子（皇女）がいたので、その後継争いは勿論あったであろう。もしかするとその辺りが伝説の基になっているのかも知れない。また、かつて羽黒神社のすぐ下にあった別当寺（神仏習合説に基づき神社に設けられていたお寺）の青葉山寂光寺（後に独眼竜伊達政宗に従い仙台に移転）の縁起によれば、羽黒神社のご祭神は稲倉魂神（ウガノミタマノカミ）（倉稲魂命（クライナタマノミコト）、いわゆるお稲荷さんで五穀豊穡の神）となっていて、石姫・ヌナカフトノミコトの伝承は伝えられていないという。

ところで、ヌナカフトノミコトの従者6人と石姫の家臣7人の後継は、後世それぞれ六供（正式には六供僧）^{しちみやびと}・七宮人と呼ばれ羽黒神社の祭事を取り仕切り山伏村の中核をにない、その子孫の皆さんは現在も羽黒神社の近くに住んでいるそうである。また、六供は、羽黒神社の旧参道御神坂^{おみさか}に沿い6社の摂社（本社に付属し縁故の深い神をまつた神社）を護持している。下から順に^{しょうはちまんぐう}正八幡宮（八幡神社）^{てんじんぐう}・天神宮（天神社）^{ごすてんおうぐう}・牛頭天王宮（八坂神社）^{さんぼうこうじん}・三宝荒神（三方神社）^{さんのうぐう}・山王宮（日吉神社）^{いちよしみんぐう}・一宮明神（稲荷神社）である（御山の六宮）。また、七宮人もそれぞれ「大明神」社をお祀りしていたそうであるが現在はない。

なお、御神坂沿いの西屋敷地区に現在も山伏村の伝統を伝える集落があるが、これは近世になって再興された宿坊跡であるという。中世山上の山伏村は、御神坂の東側（東屋敷地区）に展開していたようである。

さて、信夫山といえ、信夫三山^{あかつきまい} 暁参り（大わらじの奉納）が有名である（信夫三山は、羽山・羽黒山・熊野山を指す）。これは、毎年旧正月1月14日（現在は新暦2月10日・11日に固定）に諸社に参拝し（暁参り）羽黒山に大わらじ（長さ12m、幅1.2m、重さ2トン）を奉納する五穀豊穡と家内安全、健脚を祈る祭りのことである。

元々は、国家長久を祈る羽黒山の神事に起源を持つといわれ、小正月とも重なり旧暦正月14日^{ごうみん}に郷民（村人）が登拝して暁天の旭^{あさひ}を拝み15日早朝帰宅していた（暁参り）。また、大わらじの奉納はこれらの神事とは別で、後世、郷民が^{わざわい}禍を逃れるために羽黒神社手前の参道にあった^{におうもん}仁王門にわらじなどを納めたものが起源だということである。これらが現在行われている^{あかつきまい}暁参りの起源のようである。なお、仁王門は、明治元年（1868）3月の神仏分離令で廃止されたため、わらじなどは羽黒神社境内の健脚を祈る^{あしお}足尾神社に奉納されることとなり、奉納する村々が競い合い現在のような巨大なわらじとなったようである。

（本項、梅宮 茂『信夫山めぐり』をもとに整理した。その他参考、浦部 博『信夫山おもしろ話 信夫山の伝説・伝承』、『信達一統志』。）

私事であるが福島市内の筆者実家前はわらじ奉納順路になっていて、晩年寝たきりになっていた母親も窓越しに大わらじを見るのを楽しみにしていた。筆者等が子どもの頃は、市内の映画館や遊技場がオールナイトと称して夜通し営業しており、実家前の道路も夜通し暁参りの人波が絶えなかったものである。（写真-21①～写真-28⑧）



写真-21① 羽黒山（羽黒神社）と旧山伏村。赤鳥居の道路が旧参道御神坂（おみさか）で右下林の中へ続く（三つ岐（また）付近）。手前の道路は分岐している羽山駆け道で寺山を通過して羽山へ向かう。薬師寺から望む。



写真-21② 御神坂（旧参道入口）



写真一22① 御神坂(旧参道)、西屋敷地区鳥居平(一ノ平)。上り口側を望む。御神坂は杉林へ直進、右へ分岐している道路は羽山馳け道で左に「念仏橋の碑」あり。左端に八幡宮、右上に薬師寺が見える。



写真一22② 「念仏橋の碑」文永10年(1273年)銘あり。泉川(信夫山トンネル北側)の橋になっていたが昭和6年に戻されたもの。左はその経緯を説明した副碑(福島高校美術教師歴史家堀江繁太郎筆)。右側は羽山馳け道。



写真一22③ 御神坂、西屋敷地区鳥居平(一ノ平)から羽黒神社側を望む。大鳥居左側、天神宮、鳥居柱左隣り宝塔(明和年間)。



写真一22④ 六撰社・正八幡宮(八幡神社)。六供(ろつく)筆頭八幡院・渡辺家護持。



写真一22⑤ 六撰社・天神宮(天神社)。六供・自在院西坂家護持。



写真-23① 御神坂(旧参道)、大鳥居付近から羽黒神社側を望む。中央、白い建物の手前が御山観音。



写真-23② 羽黒山観世音(御山観音)。信達三十三観音、第3番札所



写真-24① 御神坂、西坂稲荷(猫稲荷)入口から羽黒神社側望む。写真中央石灯籠箇所、牛頭(ごず)天王宮(八坂神社)。



写真-24② 西坂稲荷(猫稲荷)、現在人気上昇中。宮人(みやびと)峯雲院西坂家護持。



写真-24③ 六撰社・牛頭天王宮(八坂神社)。六供・祇園院小野家護持。



写真一25① 御神坂、六供・三宝院加藤家前。
石灯籠は(宿坊遺構加藤家の庭前)、
文化8年(1811年)3月3日
福島町飛脚問屋島屋支店奉納
(毎年大わらじも奉納)。



写真一25② 大日如来幸福堂、平成25年7月27日
座像安置式。
御神坂、六供・三宝院加藤家前切り株
空洞。



写真一26① 御神坂、三ノ平(羽黒神社三ノ鳥居跡)
結界(制限区域、階段の上)を望む。
左側、一ノ宮明神(稲荷神社)
・右側下、三宝荒神(三方神社)
・右側上、山王宮(日吉神社)。



写真一26② 六撰社・三宝荒神(三方神社
・庭渡明神)。
六供・三宝院加藤家護持。



写真一26③ 六撰社・山王宮(日吉神社)。
六供・山王院菅野家護持。



写真一26④ 六撰社・一ノ宮明神(稲荷神社
・塩釜神社)。
六供・一宮院西坂家護持。



写真一27① 結界内参道を階段下(一周道路)から望む。左上小牛田山神、右上石碑は「大黒天」。写真奥は仁王門跡。



写真一27② 結界内参道、仁王門前の行場岩(ぎょうばいわ、修業の場所)跡。写真中央仁王門跡(白い説明板)



写真一27③ 羽黒神社境内下の石段から望む(赤い建物が羽黒神社)。



写真一28① 福島市信夫山羽黒山頂上・信夫三山暁参り。羽黒神社(羽黒大権現)と大わらじ(長さ12m、幅1.4m、重さ2トン)。



写真一28② 羽黒神社(羽黒大権現)。ご祭神第30代敏達天皇・ヌナクラフトタマシキノミコ、異説:ヌナカフトノミコ(敏達天皇兄)、稲倉魂神。旧社殿 S51.8.5 消失、その後再建。



写真一28③ 大わらじ(長さ12m、幅1.4m、重さ2トン)、2月11日に奉納。
H310309



写真一28④ 足尾神社(石宮)



写真一28⑤ 福島市内実家前を練り歩く
母が見た最後のおおわらじ。
H250210



写真一28⑥ 信夫山が北限とされるゆず畑。
羽黒神社東側。



写真一28⑦ 黒沼神社(延喜式・式内社)、
ご祭神:黒沼大神(水の神様)、
合祀:石比売皇后(石姫、
第29代欽明天皇皇后)、
神社縁起より



写真一28⑧ 伝説腰掛石。
石姫皇后(欽明天皇皇后)が
この石にお掛けになったまま
お亡くなりになったという。
上の礎石は後世(M40.3)設置の
石灯笼跡。

参考〈信夫山の成立ちと名前の謂れ等〉

信夫山の成立ちは次のようであったという。福島盆地は、地質時代の新第三紀中新世（533 万年前～2303 万年前）の初めはまだ海底で、中新世の後期（1000 万年前）には奥羽山脈（吾妻山）が隆起を始め 500 万年前には福島盆地も陸化していった。この頃火山活動も活発化し、現在の信夫山の地下にはマグマが貫入し固い地層（岩石）となった。50 万年前頃盆地周辺に断層が生じ、盆地は逆に陥没（約 130m）したが、固い地盤（岩石：流紋岩りゅうもんがんないし石英粗面岩せきえいそめんがんなど）となっていた信夫山付近は陥没せず取り残された。その後盆地周辺からの土石の流入があり信夫山の周囲に堆積し現在の福島盆地となった。盆地陥没の際に取り残された信夫山等は土石等からの埋没を免れ現在のような形に残されたという（残丘ざんきゅうといわれる）。

なお、福島盆地（信達平野）は太古の昔は大きな湖で、信夫山はその中に浮かぶ島であったという伝説がある。信夫山は、農耕の守り神として祀られていたという。福島周辺には、そのような伝承を裏付けるような地名、例えば伏拝ふりおがみ・土船つちふね・船引沢ふなひきざわ等が存在する。

（浦部 博『信夫山おもしろ話 信夫山の伝説・伝承』、『こでらんに de Fukushima 通ガイドブック（特集信夫山）』をもとに整理した。）

さて、信夫山或いは旧信夫郡（現在のほぼ福島市域）等の“しのぶ”の謂れはなんであろうか。一説に、神代の古昔、平原に独立峰（信夫山）があり何もないそのところに初めて生えたのが葎よもぎのようなものであった。草でもなく木でもなく竹に似ているので篠しのと名付けられた。始めて生じたので篠生しのぶと云い後に篠夫しのぶとなり、同音の信夫となり信夫山という名称となった。信夫郡と云う名は信夫山から来ているものである（前掲書『信達一統志』）。また、信達平野の平野を意味するアイヌ語から由来しているとの説もある（前掲書『福島大百科事典』）。

信夫山は歌枕になっていて多くの歌が詠まれ古代から知られていたところである。

おわりに

何時も見ている信夫山や栗子連山、吾妻・安達太良連峰など聞きかじりで知っているつもりのことでも、少し掘り下げると分からないことが多く、或いはいざその根拠となるとお手上げである。今回は、にわか勉強の付け焼き刃の感は免れないが整理してみた。諸賢のご批判ご教授をお願いしたいと思う。

本報告書の編集にあたってご協力をいただいた大滝会 HP 管理人紺野文英様に御礼申し上げます。

完

【追記】

令和元年(2019年)5月9日、吾妻山の噴火警戒レベルが1から2(火口周辺規制)に再び引き上げられました(5月9日18時40分気象庁発表)。

従って、大穴火口から1.5kmは立ち入り禁止となり、先に5月31日再開通を目指していた磐梯吾妻スカイラインも交通止めとなります(福島県HP 5月9日発表)。

(令和元年5月11日・記)